

びわの毛皮

写真&エッセイ

仲山 清

WANIPRODUCTION





「大根の花。学名は知らない」

竹林の中のおばあさんは答えて、わらった。

ダイコンという野菜はあっても、おなじ名の草花はなさそうだ。

しらべてみれば、ハナダイコン。

ハナダイコンを略して、ダイコン。

それならば、「ダイコンの花」となってもおかしくない。

「畑の大根の花は白」ともいった。

これもちょっとちがう。

うすいむらさきがまじる。

これも略して、「白」といったか。

色を略す。緑と青をいっしょにして「あお」といったりする。
黄色と橙色も、黄色でくくって通用させたりする。

だが、私たちの眼は、緑ひとつをとっても、さまざまな緑を見てとることができる

。

これはすばらしい機能ではないか。

ひとついろに見て、ぼんやりするのもいいし、きめ細かさに心を泳がせて楽しむのもいい。

しかし、ハナダイコンの紫を見ながら、紫でない、ほかの色のことを考えるのは、できそうで、なかなかむずかしいようだ。





県境の橋をわたると、森の顔つきがかわる。
のっぺりとした表情から、彫りの深い表情に。
したしみやすく、誘惑的ですからある森が前方にみえてくる。

わが町から、東へ、海まで五十キロ走ってもほとんど標高差ゼロの道のりだが、同じ
関東平野で、南へ直線距離にして十キロほど走れば、おおぶりの坂道をうねっていく異
国であり、ライダーのわたしは異邦の旅人になる。

■房総風土記の丘

黒いサクラランボはきいたことがあるけれど、それが赤い実といっしょに同じ木になる
ものなのかどうか。



赤い実は、やがて、黒へとかわるのだろうか。

直径十ミリほどの固い実からは、そうした兆しはうかがえなかったけれど。

資料館のひとにたずねてみればよかった、とあとになっておもった。

受付のひとと、話はしたのだ。サクランボの話ではなく、館の前庭に栽培されているホトトギスについて。

メタセコイヤの木の下で、そこから落ちるしずくが、ホトトギスによからぬ影響を与えているのではないか、とそのひとはいう。

さらに、ここでは自生しているのがほかにあって、そのひとも、ことしこそ、その花をみたい、という。

ことしは、だから、龍ヶ崎と、もしかすると成田市でも、自生のホトトギスがみられるかもしれない。



花びらが落ち、びわの毛皮が残る。

いや、毛皮のなかでは、つぎの夏へ向けて、実りへのいとなみが絶えることはない。

ただ外気は冷たく、毛皮はいよいよ毛ぶかく、いのちを包む。



森のほとりのユズは
実るにまかせ
落ちるにまかせ
ふたつみつつ、ひろって
くたびれたコートのポケットにしのばせ

わたしのふるまいに
森がさざめき
やせた白い花が
こつぶの赤い実が
しんとした冷たい空気をやぶって
かがやきはじめる



わたしは ちいさなけもののように
おののき
ふるえ
枯れ草のふりをする



駐車場の周縁にくい打たれ、太い針金がいっぼん張り巡らされている。

この針金がトンボの恰好の休息の場らしく…いや、トンボがそこに止まって、はたして休息しているのかどうか、そんなふうに見せかけて獲物の飛来を待ち受けているのかもしれないが。

手なぐさみの写真撮影で針金上のトンボを撮っていると、入れ替わりにやってきたトンボがいて、そいつは口の部分を光らせている。なにかとおもえば、小さな虫を口に含んでいて、獲物の透明な羽が午後の光を受けて光っているのだ。

トンボがなにかの虫を追っかけるのを見ることはあっても、捕食しているさまを見ることはめったにない。（いちど、トンボがトンボを喰っているのを目撃したことがある。喰っているトンボと喰われているトンボのあたまが同じ大きさでならぶのを見るのは、ちょっとおぞましい）

針金上のそいつは、のんきにカメラを持ってかまえているやつのところへわざわざやってきて、

「ほら見てくれ、いま、ご馳走にありついたんだ」



とばかりにムシャムシャやっているというわけだ。

じつにムシャムシャと口を動かすさまは、ヒトとそっくりで、無精ひげを生やしたおっさんが、喰い意地を…というかんじなのだ。

そしてあろうことか上唇をひらいて、喰っているものをわざわざ見せびらかしたりする。

「おれの周りにそんなことをするやつはひとりもいねえよ」

べろりと舌まで見せてくれそうなの。

いや、舌も歯もないはずだが、舌なめずりをして。

と、ヒトの目の前ですっかり獲物を嚙下して満足げな顔をくらくら振っている。

いかにもヒトと似た喰いっぷりに、特に親近感がわくのもなく、むしろ、おれもトンボと同じだ、とみずからを卑下するような心持になるのだが、ヒトと似ている、ということでは、トンボの歯ぎしりの音を聴いたという話を知って、こちらのほうにもっと興味をもったのだ。

ブログの記事で、<ギリギリという物音を聴いて、もしやとおもったら、トンボが歯ぎしりをしていた>とある。（「いしころとまとの花野果村（はなやかむら）」2007年9月・宮城県）

たとえば、森で聴くウグイスの鳴き声は非常に大きく、「ホー、ホケキョ」にうんざりすることがある。ラジオ、テレビで聴いているだけで、ホンモノを聴いたことがなければ、

「スピーカーで鳴らしている」

と誤解するひともいるのではないか。

トンボはよく歯ぎしりをするのか、そしてそれはどれほどの大きさの音なのか知りたいところだが（顔を近づけて歯ぎしりを確認したらしいが）それにしてもそんな音が聴こえるほどの環境というのは、また、どんな静寂なのかとおもう。

拙宅もうしろに小高い丘を控えて、わが身はほとんど森の住人のおもむきなのだが、この季節、日中のほうが静かで、夜間がうるさい。秋の虫の声だ。

はなれの部屋、自称ミニスタジオ、超ミニスタジオの部屋でなにかを録音したくても、締め切った部屋へ虫の声が入ってくる。入ってきた虫なら追い出すか殺虫剤ですむが、虫の声はそうはいかない。

部屋は木造、周囲はサイディング。部屋の中は音に関する機材だけでがらんとして、吸音の設備はないから、染み入ってきた虫の声が部屋の中で増幅するような按配なのだ。そもそもがスタジオとしてはまずい。外へ出ればもちろんもっとやかましい。しかしともかくミニでも超ミニでもいいが、スタジオとしては最悪であり、同時に私の愛すべき環境なのである。



【写真】白い建造物が岡堰。右手前は水神宮がある水神岬。堰と水神岬の間に間宮林蔵の銅像が立つ中州。ここから右の土手へ歩道橋が新設された（白い手すりと、1本の橋脚が見える）。左奥は筑波山。

小貝川は岡堰の話だ。

ここは景勝地とされている。

だが、堰が造りかえられてから、ようすが変わった。

かつて中州にはサクラの木があって、春は花見客でにぎわった。

この木がなくなった。岸辺のひとところに移されたのだ。

まあ、そこまではいい。

中州には、堰の一部がモニュメントとして保存された。間宮林蔵の銅像はそのまま、動かされることはなかった。間宮林蔵の生家が近く（伊奈町上平柳）にある。

さてその中州へ、一年あまり前に橋がかけられた。

これがひどく目障りな代物だ。

岡堰には、中州のほかに、水神が祀られた岬がある。

そこから眺める筑波山が＜景勝＞の重要なポイントになったであろうことは想像に難くない。

岬から、もともとの堰を見ると、はるか向こうに筑波がある。そんな構図になる。



いまは、立派な堰を眺めようとする、中州にかかった橋がさえぎる。
百メートルあまりの橋じたいがなんともいいがたく無料である。
実用には幅広だし、観光の配慮もない。
ここで立ちどまっても、さらに歩いても、ここから逃れてはたから見ても、ちっとも絵にならない。
ボランティアのパトロールおじさんは取手市民だが、よそ者の私よりももっと不満を持っていた。
橋ひとつに次から次へと出てくる。
「茨城百景つたって、茨城にやなんにもねえ」
橋を架けるのに1億という金をかけても、新規の掲示板には貼り紙の一枚さえ貼られたことがない、という。これも屋根つきの立派なものが三基ある。
中州は周囲三百メートルほど。たったそれだけの広さ。
橋を渡って、なにをする？
おじさんはいった。
「間宮林蔵が泣いてるよ」

(2008.7) このページの写真は2008年5月7日撮影



【写真】幅1メートルに満たない用水路を闊歩する珍客、キジ。2008年4月

工費1億円のあの橋のたもとでのおじさんとの立ち話には、公園のありかたへの不平のほかに、パトロールのステッカーをつけた車の運転マナーについてもあったなあ、と思い出している。

「そんな運転するなら、ステッカーをはずせ」

と、おじさんはいたかったようだ。

「ああ、それなら龍ヶ崎も同じですよ」

どんな看板をしょっていても、また何もしょっていなくっても、運転マナーを守るのはあたりまえだが、蛍光塗料のついた服を着て泥棒に入るようなまねはやめろということだ。やることが目立つ。

「時間がたてば土に返るっていうが、除草剤だって、まいたあとに雨でも降れば田んぼにしみこんでいけだろう。どんなあぶねえ米つくっているかわかりやしねえ」

「ああ、龍ヶ崎もそうですよ」

なんと痴呆じみた応答か。

去年、用水路に雑魚類がいく匹も瀕死の状態になっているのを見た。

「除草剤だな」

とおもった。

数年前だが、魚をとる網を持ってあぜ道をうろついていると、田んぼの持主が訊いたものだ。

「なにか、いるかい」

わらいをふくんだ訊きかたは、こんなところにいるのはザリガニぐらいだ、とかんがえているからにちがいない。

流れの幅が1メートルもない用水路だ。稲が育ってしまえば、また次の春まではあるかなきかの流れでしかない。

しかし、田んぼに水があれば用水路もうるおい、ドジョウ、モツゴ、ときには小さなフナだっ
てつかまえられる。そんなはずはない、と田んぼの持主はおもっているにちがいない。

そうして去年、生きものが水面にプカプカ浮かんだというわけだ。

生きものの存在がそんなふうに証明されるなんて、おそろしいことだ。

あの一億円の橋のたもとで、知り合いでもないおじさんふたりが、あれもこれもほおっておい
ていいことではないと言い、うなずきあっていたのだった。



だいぶ冬らしくなった日々に、赤いバラが大小二つのつぼみをつけた。
四季咲きというけれど、冬はなかなか花ひらくことはない。
小さいほうは硬そうなつぼみである。
大きいほうは、花びらがひらきかけている。しかしひらきかけたまま幾日もたち、寒さで、
「咲くのをやめにしました」
という格好になっている。
このままほうっておけば、ただの大きなつぼみのまま、内側から腐っていくだけだろう。
それではもったいない。
一輪挿しに活けることにした。
日あたりのいい出窓においた。
午前にしたのだが、午後になると花びらが大きくゆるみ始めた。
「ちょっとテンポが速すぎやしないか」
とおもった。

これでは、日持ちもなにもなく、あつというまに散ってしまうかもしれない。

だが、つぼみのままの姿を寒気にさらして、こちらのからだまで固まってしまうようなながめのバラよりは、ひとときでも華やかに、そして大輪らしく豪華に花ひらくのを見たほうがいいにきまっている。

出窓に置いたのを移動させたりせず、一気に花ひらいて散るまでの時間を過ごすことにした。

手狭で、飾り気のない部屋には、バラ一輪でけっこう贅沢な装飾となる。

べつの部屋から移ってこちらの部屋へはいると、かすかにだが、甘い香りもいきわたっているのがわかる。

きょう晦日、あすの大晦日と、ことしをしめくくるには恰好の手慰みだ。

さて、もう一輪をどうするか。

あちらもついでに活けるとするか。

いちにち遅れて、つまり大晦日だが、一輪を花瓶に加えた。

こちらもテンポが速かった。

といっても、花ひらく方向へむかってではない。

つぎの日（元日）に指ではさんで押してみると、奥のほうがスカスカになってきているのがわかる。花びらはかたくなに閉じたままだ。

あのままほうっておいても結果はたいしてちがわなかったろう。はさみを入れるタイミングを誤ったのだらうとあきらめるほかない。

花ひらいたものと、つぼみのままのものが先をきそってポロポロ散るのだろうか。

出窓のけしきが無残にならないように、ころあいを見て捨てることにする。



【写真】カマキリ／熊蜂を捕食中。花はホトトギス。次ページの写真も同じ。2008年10月16日撮影。動画あり、文末参照。

自然観察園のネイチャーセンターの一室で昆虫図鑑のカマキリの項をみていたら、帆翔^{はんしょう}ということばが出てきた。書棚に並べきれないで奥のほうにしまわれていたものまでひっぱりだして、昆虫図鑑を五、六冊あたってみたが、帆翔がつかわれているのは一冊のみだった。

帆翔といえば、けっこうな高みを浮遊する鳥の姿しか想いうかばない。それをカマキリにおきかえるのはむずかしい。風でも上昇気流でも、カマキリがそれに乗っかって宙に浮かんでいるなんてことがあるのだろうか。

カマキリが帆翔する、といわれると、語感がこちらに愛想よく寄り添ってきて、あたかも事実がかたられているように理解してしまうが、にわかには信じがたい。昆虫学者が詩人であってはならないいわれはない。しかし記述には詩人の粉飾のにおいもする。

じっさいにカマキリが飛ぶさまを見ればわかることだが、かれらはあまりに鈍重であり、ハネじたい、風に乗るとか上昇気流に乗るとかに耐えられるつくりとはみえない。からだぜんたいからすればハネはさほど大きくなく、張りが無い。たとえば紡錘形の腹部の大きさにしたって、とうていこれを空高く運べるようなハネではないのだ。

かれらの胸部は棒状であり、かれらの体型を単純に図式化すれば、スカートをさげる首ながのハンガーのようなものだ。そんなかれらの飛行は、目的をもっているというより、たいていのばあいやみくもな逃避行による決死の舞いのようだ。美しくもなく、香気もなく、ひたすら鈍重でけだるい。うす茶とうすみどりのスカートの、数秒の飛行ののちの着地のようすときたらさらに目もあてられないぶっかっこうさだ。折りたたみの鎌のかたちをした前脚からして、着地にかなう脚ではない。飛んだら最後、着地のさまはほとんど地面にたたきつけられるのである。

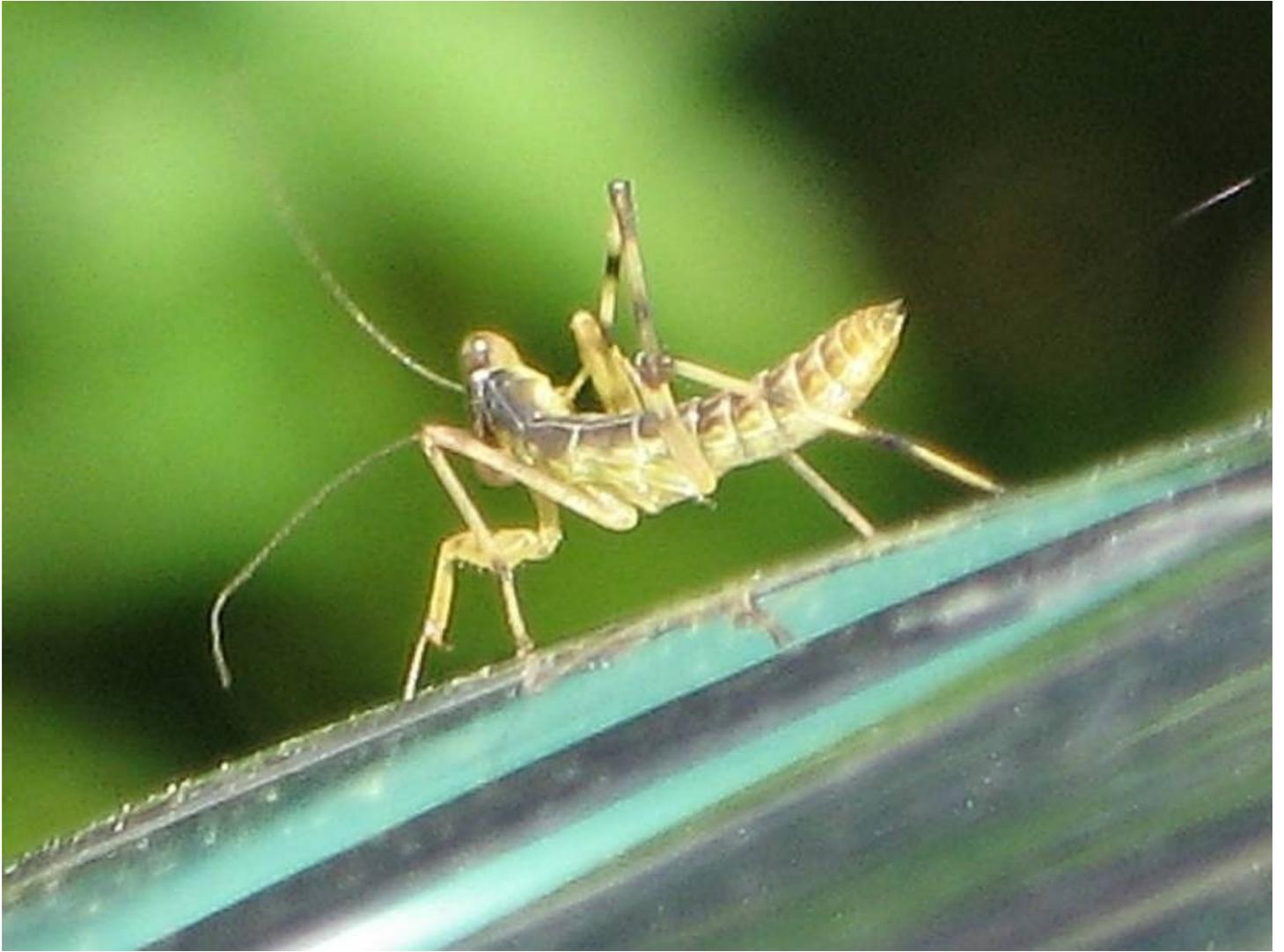
だから、もしかすると、一冊の昆虫図鑑でカマキリの項を執筆した日本のその昆虫学者は、カマキリが飛ぶすがたをたんにヨットの帆に見立てただけではないのか。飛んでいるところをみればたしかに帆を張っているようにもみえる。

…とは、しろうとの感想である。帆翔といえば鳥類のことと私などは考え、カマキリを捕食する鳥がチャンスをつかかって帆翔する、ということと混同してしまう。

長距離を飛ぶチョウの仲間ならありそうだが、カマキリが帆翔するのがほんとうなら、そのわけをひとこと付け加えておいてもらいたかった、とおもう。



▲この画像は動画でごらんいただけます。「ご馳走は熊蜂」YouTube [こちら](#) 撮影：著者



【写真】カマキリ：ふ化したばかり...／2006年6月12日撮影

生まれてまもないカマキリのハネは見てとれないほど小さい。かぼそい胸部とふっくらした腹部のさかいめに<天使の羽>みたいについている。

前脚は死神の鎌だが、それだって愛らしいことにかわりなく、かつ無力だ。

そうして尻をつんとそらへ突き出している。このお尻こそが世界の中心だというふうに。

つまり自分についてなにもわかっていない。気の強さだけがおもてに出て、腕っぶしの強さに過剰な自信を持っている。



きゃしゃなからだで枯れた篠竹をすするすのぼる。

ほどなく、ツルバラの枝に巨大な目玉のもちめしがいるのを発見する。

…よくよく見れば、頭ぜんたいがふたつの目玉だ。

…ということは、脳なんかないにひとしいのだ。こいつはうすのろにちがいない。



と、世間知らずのカマキリは早合点する。

相手がどんな習性の生きものであるかなど知る由もない。

あかんぼのカマキリの体長はまだ五ミリにもたらぬ。まるで緑色の糸くずだ。おなじ仲間が四、五十びきかたまれば、いま目の前にしている相手のからだの大きさとつりあいとれるかもしれない。それほど相手は大きい。いや、こちらが小さすぎる。

さらにあいにくなことにカマキリ自身の頭部は最大に成長しても、目前の生きものの口をひらけば余裕をもってくわえこまれる寸法しかない。こちらだって脳ミソの量は顕微鏡ものだ。

篠竹からツルバラの枝へと歩を進めたかれは、意気揚々、左右の鎌を振りあげる。

その瞬間、かれは息をのむ。目の前にとつぜん出現したのは、からだつきこそ自分より小さいが、たしかにいましがたわかれてきたばかりの仲間とおぼしき姿だ。それがいきなり数をふやして、何百、いや何千という数になっている。そしてかれが鎌を振りあげたのと同時に、相手もいっせいに鎌を振りあげてこちらへ向かってきたのだ。

…どうしてこんな目にあわなきゃならないんだ。

ぶん、と音がして、幾千とう仲間がふいに消える。現れたときよりももっと素早い。

相手が複眼の持ち主だなどとカマキリが知るはずもない。

かたわらではツルバラの血のような若葉が幾重にも抱き合ってふるえている。



あぶは、みどり色の糸くずみたいな生きもの一匹になんの関心も持たなかったのである。ただ、その場所に退屈していた。もみ手をするだけでもこの虫けらをおびえさせるには十分だろう。だがそれすら退屈しのぎにならない。

そうしてあぶは、おのれの複眼をみどりから青に塗りつぶしてあてもなくそらへ飛び立ったのだった。

●写真は、蜜を吸いながら同時に羽をつくろうハナアブ

おれを喰ってくれるかい？



【写真】カマキリ／2008年1月2日撮影

固く小さい逆三角形の頭部をみれば、
カマキリは高音域を発するかのように空想される。
とがったあごに低音域はのぞむべくもないようだ。
しかしそれは声帯とのかかわりを前提としての想像だ。

ほかの昆虫のように羽根をこすりあわせて奏でるとすれば、
どんな音色になるか。
飛ぶのもたよりなげなやわらかい羽根は
低音域でささやくだろうか。
飛ぶにはふさわしくないぼってりとした太い腹部が
低い音を野太くするか。

交尾のあと、オスは役目を終わると、あいかたに甘い声で告げる。
――さあ、おれを喰ってくれ。



きみは目深にかぶっていた帽子をあぜ道にかなぐり捨てた。
なにに腹を立てたのか、わからない。
あずまやからだれか女のひとが、
「そら」
と呼んだ。
そうか、そらという名前なんだ。
きみはあたかも、
「わたしは、そらじゃない」
とでもいうように無視している。
こぶしを握って虚空をにらんだまま動かない。
四歳くらいになると、ああして頑固にじぶんの想いを主張するのか。

■こちらの拙文をイメージして曲『きみをだれかが「そら」と呼んだ』を創ってみました。4分半ほどのDTMによる作曲です。関心がありましたらどうぞ聴いてください。[こちら](#)

テコでも動かない、といううしろ姿がほほえましい。

おさないわがままゆえのたわいない怒りにしても、名を呼ばれて返事もしないきみは、愛すべき女の子だ。

そして、そらと呼んだそのひとをきみは愛している。そのことをきみじしんが知っているのだろう。

だから虚空に向かってはっきりといえる。

「おとうさんはきれい」

そんなふうにいえば、父親が急にやさしくなることもきみは知っているのかもしれない。

なかばあきれ声で女のひとがまた呼びかける。

「ぼうしをかぶらないと、あついでしょう」

「ちっともあつくない！」

スイセンの枯れた花にとまって動かないヤンマと、あぜ道でそっぽを向いて仁王立ちしている女の子のあたまを真夏の太陽が照りつけている。

【写真】 ウチワヤンマ 2008年7月19日